

『中の根本の言葉を章とした知慧（根本中論）』

（第二十五章）

もし、これら全てが空であるならば、  
起こることは無く、壊れることは無い。  
何を捨て去り、滅したことより、  
涅槃へ至ると主張するのか。 1

もし、この全てが空でないならば、  
起こることは無く、壊れることは無い。  
何を捨て去り、滅したことより、  
涅槃へ至ると主張するのか。 2

捨て去ったこと無く、得たこと無く、  
断滅は無く、恒常は無く、  
滅は無く、生は無い。  
それが涅槃であると主張する。 3

先ず、涅槃は事物ではない。  
老死の性相を持つ背理となる。  
老と死の無い、  
事物は有るのではない。 4

もし、涅槃が事物であるならば、  
涅槃は有為となる。  
有為ではない事物は、  
何も、何処にも有るのではない。 5

もし、涅槃が事物であるならば、  
如何様にその涅槃は依拠したものではないのか。  
依拠してでない事物は、  
何も有るのではない。 6

もし、涅槃が事物でなければ、  
無事物が如何様に適うとなろうか。  
彼にとって涅槃は事物ではない、  
そこに無事物は有るのではない。 7

もし、涅槃が事物でなければ、  
如何様にその涅槃は依拠したものではないのか。  
依拠したものではない、  
無事物は有るのではない。 8

もし、これら全てが空であるならば、  
起こることは無く、壊れることは無い。  
何を捨て去り、滅すことより、  
涅槃へ至ると主張するのか。（仏・顛）

もし、この全てが空でないならば、  
起こることは無く、壊れることは無い。  
何を捨て去り、滅すことより、  
涅槃へ至ると主張するのか。（仏）

捨て去ったこと無く、得ること無く、  
断滅は無く、恒常は無く、  
滅は無く、生は無い。  
それが涅槃であると主張する。（顛）

涅槃は事物ではない。  
老死の性相を持つ背理となる。  
老と死去と死の無い、  
事物は有るのではない。（仏）

来て、行く事物は、  
依拠したか、因を為したものである。  
それは依拠したのではなく、因を為してではない。  
涅槃であると示された。 9

諸々の起や壊を、  
捨て去るよう教示者が御言葉を賜れた。  
それ故に、涅槃とは  
事物でなく、無事物でない正しい。 10

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
事物と無事物であるものが、  
解脱となるが、それは正理ではない。 11

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
涅槃は依拠していないのではない。  
その二つは依拠してである故である。 12

如何様に涅槃が、  
事物と無事物の双方であろうか。  
涅槃は無為であり、  
事物と無事物は有為である。 13

如何様に涅槃に、  
事物と無事物の二つが有ろうか。  
その二つは一つに有るのではなく、  
光と闇の如くである。 14

事物でなく無事物でないものを、  
涅槃であると示すものは、  
無事物と事物の二つが  
成立したならば、それは成立したとなる。 15

もし、涅槃が、  
事物でなく無事物でなければ、  
「事物でなく無事物でない」と、  
何ものがそれを顕かにするのか。 16

世尊は涅槃を得てから、  
「有る」と顕かではない。その如く、  
「無い。」あるいは「双方」か、  
「双方ではない」とも顕かではない。 17

来て、行く事物は、  
依拠するか、因を為したものである。  
それは依拠したのではなく、因を為してで  
はない。涅槃であると示された。(仏)

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
事物と無事物であるものが、  
解脱となることは、正理ではない。(仏)

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
涅槃は依拠していないのではない。  
それは二つに依拠した故である。(仏)

もし、涅槃が、  
事物と無事物の双方であるならば、  
涅槃は無為であり、  
事物と無事物は有為である。(仏)

もし、涅槃に、  
事物と無事物の二つが有るならば、  
その二つは一つに有るのではなく、  
光と闇の如くである。(仏)

事物でなく無事物でないものを、  
涅槃であると示すものは、  
無事物と事物の二つが  
成立したならば、それは成立するとなる。(仏・顕)

世尊は留まられたとしても、  
「有る」と顕かではない。その如く、  
「無い。」あるいは「双方」か、  
「双方ではない」とも顕かではない。 18

輪廻は涅槃より、  
違いは僅かにも有るのではない。  
涅槃は輪廻より、  
違いは僅かにも有るのではない。 19

涅槃の果てであるものは、  
それは輪廻の果てであり、  
その二つの僅かな違いは、  
非常に微かにも有るのではない。 20

御方が逝かれて以降、果て等や、  
恒常である等の緒見解は、  
涅槃と、後の果てと、  
前の果てに依拠したのである。 21

一切の事物が空であることにおいて、  
果てが有るとは何か。果てが無いとは何か。  
果てと果て無しとは何か。  
果てと果て無しでないとは何か。 22

そのものとは何か。他とは何か。  
恒常とは何か。無常とは何か。  
恒常と無常の双方とは何か。  
双方でないとは、何ものであるか。 23

一切の認識対象が寂滅し、  
戲論が寂滅し、寂静であり、  
仏陀は、何処においても、  
誰にも、如何なる法も示していない。 24

「涅槃を考察する」という第二十五章である。

(第二十六章)

無明が覆い隠したことによって、再びの輪廻の為に、  
三様相の諸行を、  
顕現して行うものである  
それらの業によって、衆生へと赴く。 1

輪廻は涅槃より、  
違いは僅かにも有るのではない。  
涅槃も輪廻より、  
違いは僅かにも有るのではない。(顕)

滅したことや、果て等や、  
恒常である等の緒見解は、  
涅槃と、後の果てと、  
前の果てに依拠したのである。(仏)

一切の事物が空であることにおいて、  
果てが有るとは何か。果てが無いとは何か。  
果てと果て無しとは何か。  
果てでなく果て無しでないとは何か。(仏)

そのものとは何か。他とは何か。  
恒常とは何か。無常とは何か。  
恒常と無常の双方とは何か。  
双方でないも、何ものであるか。(仏・顕)

行の縁を持つ識は、  
諸衆生へと入り込むことになる。  
識が入ったとなれば、  
名と色になることになる。 2

名と色になったならば、  
六處が起こることになる。  
六處に依拠して、  
触が正しく起こるとなる。 3

眼と色形と念じるものに、  
依拠して生じるのみであり、  
そのように眼と色形に依拠して、  
識が生じるとなる。 4

眼と色形と識の、  
三つが集まったもの。  
それが触である。その触より、  
受が全く起こるとなる。 5

受の縁によって愛であり、  
受の為に愛すとなる。  
愛となれば取。  
四様相の取となる。 6

取が有れば、取る者の  
有がよく起こるとなる。  
もし、取が無ければ  
解脱するとなり、有にはならない。 7

その有も五蘊である。  
有より生となる。  
老死と、悲痛と、  
慟哭と、苦と、 8

心不樂と、混乱等、  
それらは生より、よく起こる。  
そのように苦の蘊、  
このただそれだけが、起こることになる。 9

輪廻の根本は行であり、  
それ故に、賢者達は行をなさない。  
それ故に、不賢の者は行為者である。  
不賢の者は、まさしくそれを見る故である。 10

名と色になったならば、  
六處が起こることになる。  
六處に依拠して、  
それより触が起こるとなる。(仏)

名と色形と念じるものに、  
依拠して生じるのみである。  
そのように名と色形に依拠して、  
識が生じるとなる。(仏)

その有も五蘊である。  
有よりは生が起こる。  
老死と、悲痛と、  
慟哭と、苦と、(8・仏)

その有も五蘊である。  
その有より生が起こる。  
老死と、悲痛と、  
慟哭と、苦と、(8・頌)

それ故に、賢者達は輪廻の、  
根本の行を行わない。  
それ故に、不賢の者は行為者である。  
不賢の者は、まさしくそれを見る故である。(10・仏)

輪廻の根本は行であり、  
それ故に、賢者達は行をなさない。  
それ故に、不賢の者は行為者である。  
賢者は、真如を見る故である。(10・頌)

## 根本中論

無明が滅したとなれば、  
諸行も起こるとはならない。  
無明が滅すとなることは、  
知が真如を修したことによってである。 11

無明が滅したとなれば、  
全ての諸行は起こるとはならない。  
無明が滅したとなれば、  
知が真如を修したことによってである。(顛)

それやそれが滅したことによって、  
それやそれは実現しない。  
苦の蘊ただそれだけのもの。  
それは、そのように正しく滅す。 12

「有（輪廻）の十二支分を考察する」という第二十六章である。

※（仏）は、『根本中論』チョコロ訳（『ブッダパーリタ』に引用された旧訳）で、パツァブ訳（新訳）と異なる記述。

（顛）は、パツァブ訳（新訳）ではあるが、『根本中論』本論と記述が異なる『顛句論』で引用された偈を示す。

DECHEN 訳